

平成 29 年度 校内研究計画

研究主任 橋本 良太

1 これまでの研究の成果と課題

(1) 平成 21 年度から平成 23 年度まで

《研究主題》

個に応じた教科指導による基礎力の定着

～児童生徒それぞれの実態に配慮した複式授業の実践と取り組みを通して～

異文化理解を通し、国際社会に対応できる態度・能力の育成

～「わたしたちのカタール」の有効的な活用方法の模索と内容の拡充～

ドーハ日本人学校が再開して以来、校内研究は「個に応じた教科指導による基礎力の定着」と「異文化理解を通し、国際社会に対応できる態度・能力の育成」を目指して実践を積み重ねてきた。

学力面では、小規模校・少人数学級（開校一年目スタート時点の児童生徒数は 8 名，二年目は 19 名，三年目は 28 名）の利点を生かし、児童生徒の基礎学力を向上させるために、個の実態に応じて細やかな学習指導を進めてきた。また、小学部 1・2 年生，3・4 年生，5・6 年生がすべて複式学級であったため、複式授業の指導案の作成や指導方法の工夫についても、研究を進めてきた。

異文化理解の面については、副教材として「わたしたちのカタール」を作成し、現地理解教育に役立てようとしてきた。

(2) 平成 24 年度から平成 25 年度まで

《研究主題》

伝え合い、学び合い、自己の考えを再構築する児童生徒の育成

～話し合いの活性化を図る ICT の活用～

児童生徒数の増加（四年目は 29 名，五年目終了時には 40 名）に伴い、児童生徒個々の学力を正確に捉えることが課題となった。そこで、平成 24 年度より、小学部・中学部共に CRT 検査を実施し、まず国語、算数・数学の二教科の学力を調べることにした。その結果、たとえば国語では、「話す・聞く」領域の力が、課題であることが判明した。児童生徒の学習の様子を見ても、相手や場面に応じて分かりやすく伝える（表現）ことが苦手であり、相手の意見や考えを聞いて、自己の考えを深める（思考・判断）点に課題があることが分かった。

平成 24 年度からの校内研究では、各教科のねらいを明確にして、言語活動の充実を図ることを目標にした。そこで、先の「話す・聞く」領域の力を「話し合う力」として捉え直し、話し合いを活性化するための一手段として、ICT を研究実践の中に適宜取り入れることにした。

平成 25 年度が終わるまでに、大型テレビ 4 台，教育用タブレット PC (iPad) 8 台を導入することができた（資料 1）。また、話し合う力を身に付けさせるために、各教室に「話形」を掲示し、話形をもとにして話し合いをするように指導してきた。

(3) 平成 26 年度から平成 28 年度まで

《研究主題》

個の学びと集団の学びが響き合い、自己の考えを再構築し表現する児童生徒の育成
～ICTを活用した学習指導、国際理解教育の実践～

前年度の研究の成果と課題、かつ本校の児童生徒の実態を踏まえると、個に応じた学習指導を継続して行い、基礎・基本の力を確実に定着させる課題が見えてきた。また、同時に話し合う力（表現）も身に付けさせ、自己の考え（思考・判断力）をさらに深めていく手だてを取り入れた。

そこで、基礎・基本の力の定着を目指す場を「個の学び」の中で行い、話し合う力を身に付ける場を「集団の学び」の中で行うことにした。そして、「個の学び」と「集団の学び」を連関させ（響き合い）学びの質を深めることで、「自己の考えを再構築し表現する児童生徒の育成」を目指すことにした。

ICTについては、平成 26 年度第 40 回パナソニック教育財団の実践研究助成を受けることができた。この助成により、大型テレビ 3 台、ビデオカメラ、ブルーレイレコーダーを購入し、各教室に大型テレビを一台ずつ配置することができた。

なお、パナソニック教育財団に提出した研究主題は「ICT活用によるイメージを表現する力の育成～和太鼓・ソーランを通して日本の伝統文化を学び、発信する実践の一例～」である。この研究も、校内研究の一部として位置付け実践した。

2 今年度の研究主題と主題設定の理由

【平成 29 年度の研究主題】

グローバル社会に対応し、生き生きと協働し学び続ける児童・生徒の育成
～課題解決型の学びを通して～

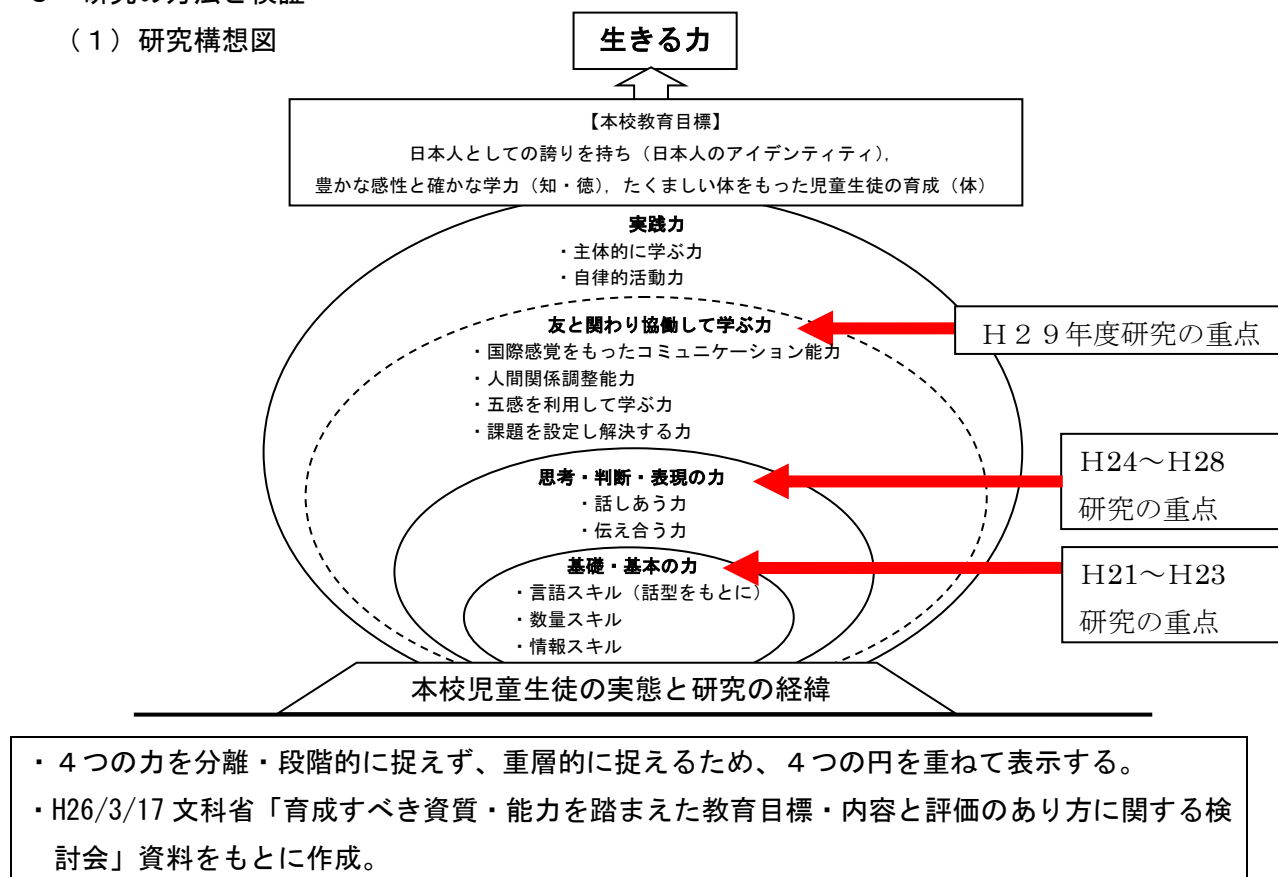
これまでの研究成果により、本校の児童生徒の学力は確実に向上してきている。また、「響き合い」をテーマにした 3 年間の継続研究で、話し合いの力も身に付けてきた。一方で児童生徒の学習の様子から、学習に関する意欲は高いが、生きる力につながるような学びに意欲的な児童生徒は少ないことが気にかかる。そこで、受け身の学びから、人生の充実感や学ぶ楽しみにまでつながる主体的な学びをいかに引き出すことができるかが課題であることが見えてきた。

そこで、本年度は「グローバル社会に対応し、生き生きと協働し学び続ける児童・生徒の育成」を研究主題とし、学習を生きる力につなげていきたい。

海外という地域特性を生かし、校内での全教科・領域での指導に加え、校外（日本人会での発表、現地校との交流、日本の学校との交流）での実践をとおして、今までの課題解決型学習の中で培った課題解決力やグローバルな社会を生き抜くコミュニケーション能力、協働する力を育てたいと考えている。

3 研究の方法と検証

(1) 研究構想図



(2) 研究の方法

①児童・生徒の実態把握

「友と関わり協働して学ぶ」ことに関し、日常生活、委員会、係り活動、授業の様子から児童・生徒の実態を把握し、今後の学習指導に生かす。

②一人一公開研究授業

専門教科、研究をしてみたい教科、特活などの中から一つ選び、研究主題に沿った研究を行う。一年間を通し、継続して取り組める活動を検討する。各自研究計画を作成し、研究を進める。そのなかで、一人一公開研究授業を行う。（派遣最終年次に文科省に提出する現地事情調査と絡めて各自が研究推進すること。）

③研究協議会の実施

公開授業の後は、授業研究会を行う。成果と課題を検討する。

④現地校外学習と「わたしたちのカタール」の活用

年二回開催予定の現地理解校外学習では、事前・事後学習を行う。その際、「わたしたちのカタール」を活用した授業を行う。校外学習では、児童・生徒に施設の担当者とのかかわりをもたせる。

⑥間接的交流（Web交流）と直接的実践

- ・日本の小、中学校（予定）
- ・ドーハ以外の日本人学校
- ・カタールの現地校
- ・カタールのインターナショナルスクール
- ・カタール大学の日本文化紹介クラス
- ・学校行事の準備、計画、実践。

(3) 授業研究の年間計画概要

学期	月	研究内容	
		教科指導	国際理解教育
1	4	・ 上旬 研究計画の検討 ・ 中旬 CRT の実施	現地理解校外学習に向けての準備
	5	・ 5/15 (月) 研究計画の提案 ・ カタール大への研修出張 5月4日(木) ＜校長, 元田, 橋本＞	5/9 (火) 第一回現地理解校外学習
	6	・ 6月5日(火) 単元研修中間報告 ◎一人一公開研究授業①(橋本) *重点項目に関する研究の手だて	交流に向けての準備 アラビア歴史の教育課程について (講師: ハザール)
	7	◎一人一公開研究授業②(小比賀) ・ 上旬 CRT の結果分析	オマーン補習校との交流会(予定) 日本の小学校との交流会(予定)
2	9	◎一人一公開研究授業③(池田) ◎一人一公開研究授業④(渡辺)	交流に向けての準備
	10	◎一人一公開研究授業⑤(鈴木) ◎一人一公開研究授業⑥(佐伯)	インターナショナルスクールとの交流 10/25(水) 第二回現地理解校外学習 10/25-26(水・木) 修学旅行(砂漠)
	11	◎一人一公開研究授業⑦(元田) ・ カタール大への研修出張 11月 ＜渡辺, 池田, 佐伯＞	交流に向けての準備
	12	◎一人一公開研究授業⑧(小松)	カタール現地校との交流会
3	1	・ 研究のまとめ製作開始	日本の小学校との交流会(予定)
	2	・ 研究のまとめ完成 ・ カタール大への研修出張 2月 ＜鈴木, 小比賀＞	
	3	・ 3/1 保護者会で説明(1年間の学習の様子をスライドとともに10分程度)	

一人一公開授業研究について

- ① 6月～1月で一人1研究授業を行う。(年8回 開催予定)
- ② 「課題解決学習をベースとした協働して学ぶ」をテーマに現地事情調査と絡めた授業展開を考える。
- ③ 高橋教授, 近隣, カタール大学協賛学校にオブザーバーを要請する。
- ④ 10日前に略案(別紙: 本時の学習参照)を作成し, 英訳を橋本に提出する。
- ⑤ 現地事情に関わる調査, 質問, アンケート等も同時に提出する。
- ⑥ 1週間前にオブザーバーを要請するメールを指導案と⑤とともに配布する。
- ⑦ 一つの公開研究授業に校内から3名以上は出席する。
- ⑧ 参観者は振り返りメモ(別紙参照)を使いメモを取った上で, 授業研究会に臨む。
- ⑨ 公開研究授業は6限目に行う。(45分, 50分いずれの場合も)
- ⑩ 15:40から16:30で授業研究会をもつ。
- ⑪ 研究会の中で, 現地事情調査に関わる質問を扱うことも可とする。
- ⑫ 振り返りメモを授業者が受け取る。
- ⑬ 授業者は, 略案, 振り返りメモのまとめを橋本に提出する。